

津波てんでんこ（2）

釜石市が位置する三陸海岸は、以前から津波の被害を繰り返し受けてきました。このため、釜石市では、8年前から群馬大学大学院の片田教授による津波防災教育を行ってきました。その中で、子ども達が主体性を発揮できるよう、より実践的な避難訓練や、学校の地域特性に応じたハザードマップの作成などの防災対策を進めてきたことが、東日本大震災に際しては大きな成果を上げたといえそうです。

片田教授によると、津波防災教育で小中学生に伝えてきたことは、「大いなる自然の営みに畏敬の念を持ち、行政に委ねることなく、自らの命を守ることに主体的たれ」ということであり、避難に当たっては

「想定にとらわれるな」

「最善を尽くせ」

「率先避難者たれ」

という3原則を常にいい続けてきたそうです。

第1原則の「想定にとらわれるな」というのは、行政が作成したハザードマップを盲信してはならないということであり、第2原則の「最善を尽くせ」というのは、その時にできる最善の対応をすべきというものです。

そして、第3の原則「率先避難者たれ」というのは、「率先して避難すれば、その姿を見て周囲の人もついてくる。そうすることで、結果として多くの人々を救える。だから、まずは自分の命を守りぬくことが先決だ」というものです。

もともと三陸地方には「津波てんでんこ」という言葉があります。津波が来たら、家族のことを気にすることなく、ひとりひとりがてんでんばらばらに逃げろ、という意味であり、「率先避難者たれ」と相通するものがあります。

この「津波てんでんこ」に対しては、「自分だけが助かればいいのか」という疑問の声が聞こえてきそうですが、片田教授も、「そうした倫理観を乗り越えることが最大の課題だった」といいます。

地震直後、中学生が先頭に立ち、高台を目指し、駆けだすと、それを見た周辺住民も一緒に逃げて難を逃れたといえますから、「率先避難者たれ」という

教えが活かされたといえます。また、中学生達は、小学生の手を引きながら逃げしており、決して自分たちだけで逃げたのではありません。これも平素、中学生が小学生と一緒に逃げる訓練を重ねてきた成果の一つです。

今回の大震災では、家族を心配して自宅に戻ったところを津波に襲われた方や、住民の避難誘導をしていて自身は津波に呑まれた消防団員など使命に殉じた方も多くいらっしゃいました。

「津波てんでんこ」が良いというのであれば、殉職した消防団員はどう考えたらよいのかという指摘もあるでしょう。

私は、「津波てんでんこ」というのは、「自分の命は自分で守る」という強い意志と行動力がなければ、他人はおろか自分の命さえ守れないということであり、決して、「自分さえ助かればそれで良い」といっているのではないと思っています。

だからこそ、余震の続く中、中学生達は小学生の手を引いて必死に逃げたのではないのでしょうか。

今回の大震災において、「目の前にいる被災者を助けたくても助けられず、自分だけが逃げて助かった」ということを、半ば罪悪感を内に秘めながら話される被災者がいます。

それは今でも被災者の心の傷となっているかもしれませんが、私は、「津波てんでんこ」なのだから、「あなただけでも助かったことは良かったのだ」と申し上げたいと思います。

ここまで、「石巻市立大川小学校の悲劇」と「釜石の奇跡」について見てきました。

あの震災の最中、安全な所にいた私が、結果だけを見て評論家的に石巻市立大川小学校を批判することはできないし、またすべきではないと思っています。「もしも、私が現場の当事者であったら、果たして冷静で的確な判断と行動ができたか」と自ら問えば、自信はありません。

東日本大震災を契機として、今後、防災計画の見直しが進められると思いますので、それぞれの地域、それぞれの学校において、実態に即した防災計画の整備を急いでいただきたいと思います。

ただ、二つの事例を見ながら感じることは、切迫した中では身体で覚えていることが役に立つということです。形式的ではなく、より実効性のある訓練を重ねることが如何に重要であるかということ、二つの事例は良く物語っているのではないのでしょうか。（塾頭 吉田 洋一）